



ひのきの出節丸太 清楚な色合いと香りをもつ。檜の末木、あるいは70年程の芯持材からとる。乳節といつて節の座りが大きく、全体に満偏なくついているものがよい。



まき（こうやまき） 灰褐色の樹皮は縦に裂目があり薄い。高野山、奈良県東吉野に産し、木曾の五木のひとつでもある。檜以上に光沢があり、特有の香りをもち木湿に強い。



しい 表千家九畳の間の床柱に使われる。材質は堅く乾湿の変化に耐える。皮をむいて使うが虫がつきやすい。よく乾燥させた材を用いたい。小丸太を禁止、棟木に用いる。



むろのしゃれ木 樹皮および辺材部分をきれいに削りとり、グラインダーをかけ枝うちをして形を整え磨いて仕上げたもの。褐色の心材部分は香りがあり、線香にもまぜられる。



むろの変木（ねずみさし） 褐色の樹皮が縦に長くはがれる。辺材は白黄色、心材は褐色。30～40年経った風化から枯れた部分を削って仕立てる。



かえで もともと白い木だが、さらに白く仕上げられる。木肌の変化に富んだものが珍重される。関西よりも関東でよく使われることが多い。茶席ではむしろ皮付きが好まれる。